

[エッセイ]

戦争と初恋
——「自分史」の魅力——

鈴木敬司

頼り甲斐のない講師

朝日カルチャーセンターに「自分史を書く」という講座がある。3年ほど前、私の親しい友人が地方の大学へ赴任するとき、ピンチヒッターとしてその講師を引き受けさせられてしまった。彼は、「なあに、受講生たちの書いてくる『思い出の記』（確か「自分史」をこう翻訳していた）を添削してやればいいのか」、こともなげにこう語ってくれただけだった。引き継ぎもなにもない。ただ、それだけだった。友人の言葉をすっかり真にうけてしまったのがいけなかった。

さっそく、第一回目からとんだ赤恥をかいてしまった。おそらく会社の役員でもされた方であろうか、人品いやしからぬ老紳士が、やおら立ち上がって、こう質問してきた。

「講座名に『自分史』とあるが、いったい『自分史』とはどういうものなのか？なるべく分かりやすくご説明いただきたい」。

よもや、こんな質問をうけようとは夢にも考えていなかった。一瞬、顔がほてるほど狼狽した。しかし、考えてみれば狼狽するほうがおかしい。「自分史を書く」講座に来て、「『自分史』とはどんなものか？」と尋ねることは、至極あたりまえのことである。

見栄っ張りの私は、表面だけはなんとか講師らしい体面をつくろうとしたのだが、肝心な説明のほうはまことに以て怪しいものであった。さすがに老紳士は深追いはされてこなかった。が、表情にはありありと不満の色を浮かべていた。それもそのはず、喋っている当の本人によく分かっていないのだから、相手が納得するはずがない。このやりとりの結果はひじょうに冷徹なものとなった。くだんの質問をなさった老紳士は、次の回からはぶつとりと姿を見せなくなってしまったのだ。不信感の表明は直截であった。失敗ばかりしている私でさえ、これには少々参った。もしも、これが大学であれば、「休むと、単位をださないぞ」とかなんとか言って、学生たちをおどすだけでことは済む。大学の教師の考えていることなどは、まったく浮世ばなれしたものである。巷にあるカルチャーセンターなどではそうはいかない。ご本人が「いやだ」と思えば、もう次からは来なくなってしまう。

また、こんなケースもあった。300枚はたっぷりある「小説」(?)と称する手書きの草稿を持参し、「次回までに添削して来てほしい」という要求である。丁重にお断りしたところ、「そういうことをするのが、お前のしごとでないか」という顔つきをしながらも、いちおうおとなしく引っ込めた。が、以来、あまり口を利いてくれなくなってしまった。かと思うと、ご自分の家では、「葉書一枚書くのも面倒なの。だから、いつも嫁に書いてもらっていますのよ」、と涼しい顔をしている老婦人も大切な受講生の一人に数えなくてはならないのが現実。わずか20名足らずのメンバーなのに、受講生は十人十色。めいめいの人生模様があまりにも異なっているのに驚くばかり。平々凡々に生きてきた私みたいな単純な人間には、適切な助言や行き届いた対応などはできるはずがない。

受講生からのインパクト

立場を変えて、受講生の皆さんのほうから眺めれば、「なんとも、頼り甲斐のない講師だなあ」とがっかりしているに違いない。こんな情けない私の内部にも、しばらく続いているうちに「引き受けた以上、いくらかはマシなことをしなくては……」、という殊勝な気持ちが少しずつ芽生えてきたようだ。例えば、「自分史」と名のつく本を何冊か買い集めて読んだり、改めて昭和史の勉強を始めてみたりしているからだ。一方、そうした自分自身へのささやかな充電とは別に手をつけ始めたのが添削である。これがどれだけ役だっているかどうか分からないが、当の私自身の辞書を引く回数がめっぽうふえたことだけは確かだ。なんとも情けない楽屋裏を公開してしまったわけだが、これが偽らざる実体なのだからしかたがない。もちろん、こんなていたらくのままでいてよいとは思ってはいない。しかし、今の私にはこれ以上によい知恵が浮かんではこないのである。

そんな私が、最近、「自分史を書く」ということはとてもよいことだ、と思えるようになってきた。もちろんその理由を体系立った理論で説明せよ、などと言われてもそれはご勘弁ねがわねばならない。が、とにかく、教室の皆さんとの付き合いが細やかになると共に、「私が教えている」のではなく、むしろ受講生のほうから、強烈なインパクトを受けとっているような気がしてきた。これ

は本音、気取ってみたり自虐的な言辭を弄してみたりしているのではない。なぜなら、いつもやさしい笑顔を絶やさず、とても幸せそうに生きている方が、「まさか、そんな苛烈の運命を乗り越えてきたなんて！」と愕然とさせられることがあった。かと思うと、読んでいるこちらまでが陶然とさせられるような甘春な恋物語を書く人もいる。

「真珠の小箱」の幻想

だれにとっても、青春時代はその人の生涯でいちばんみずみずしく光っている。そんなみずみずしい季節の「自分史」のひとつまをお目にかけたい。

十七歳のとき、九州の片田舎で初めてラブレターを受け取った。相手は少し小柄だが好青年で、兄と同級生のYさんだった。嬉しさにはずむ胸を押さえ、そっと裏庭にのがれ、何度も何度も読み返した。数日後、村で映画が上映されることになった。ラブレターをいただいた興奮がまださめやらぬまま、「Yさんと逢える」という期待で胸をときめかせながら夜道を急いだ。

読ませてもらっているうちに年甲斐もなく、こちらの胸までときめいてくるような気がする。こんなラッキーな経験の持ち主を、仮に「S子さん」と呼んでおくことにする。

なんといっても、恋文をもらった側のリアクションの描写が素敵だ。「嬉しさにはずむ胸を押さえ、そっと裏庭にのがれ」という初々しさ、そして『『Yさんと逢える』という期待で胸をときめかせながら夜道を急」ぎながら切なく揺れる彼女の胸のときめき——このシーンは職業作家の描いた虚構ではない。実在する一人の女性のまぎれもない鮮烈な体験なのだ。

「Yさん」よ、あなた男冥利に尽きる人ですぞ。

もう一つの恋物語を引用させてもらおう。

こちらは、ちよっぴり官能的、いや、といつては言い過ぎになろう。なにしろ、15年戦争の真っ最中のことなのだから。ま、とにかくお読みいただきたい。

仕事も一段落したのでこたつに入った。お茶を飲みながらみなさんと語り合っては笑いころげていた。ふと気がつくときたつに入れている私の指に誰かの手が触れる。どきりとして引っ込めた。話中に夢中になっているふりをしていたが、私には、だれの手かがはっきり分かっていた。だから、耳たぶまでが赤くなるような気がする。あわてて、おいとまを告げ、逃げるように家に帰ってしまった。

翌日、置き忘れた裁縫箱を取りに行った。家に帰って蓋をあけてみると、箱のなかに手紙が入っているではないか。読んでゆくうちに次第に胸が高鳴り、いつの間にかめくるめく思いで時のたつのも忘れてしまっていた。でも、わたしはとても幸せだった。手紙の主はT男さんである。精いっぱい自分の思いを伝えてくれようとしている手紙の文章は、どんな文豪の文章より名文に思われた。

もし、あのときの手紙がいま手元にあつたら、私は「真珠の小箱」に入れて宝ものとしたい。

『銀の匙』の少女版みたいな作品とでもいったらいいのだろうか。ロマンスなどには程遠かった不器用な私などには扱いかねる内容である。正直に言って、照れ臭さを越えて困惑している。

ところで、最近の山手線などでは、真っ昼間からぴったりと抱擁している若い男女を見掛けることがある。そんな濃厚な厚かましい風俗とくらべ、こたつの中で異性の手が指に触れたくらいで耳まで赤くする。たったそれだけのことで、そそくさと逃げ帰るナイーブさには無類の美しさがある。この世代の人たちは、いじらしいほど慎ましやかであったのだ。

このような「慎ましき」の復権を訴えたい私は時代遅れなのだろうか。それはともかく、気になるのは二つの恋の行方である。“初恋は破れやすい”といわれるとおり、この二つの恋のいずれもが悲劇的な結末を迎えてしまった。が、戦後生まれのS子さんが結ばれなかったことの詮索はいまは差し控える。だが、『真珠の小箱』の幻想を抱く作者の愛が破綻した原因は、どうしても書きとめておかねばならない。なぜなら、「T男さん」の名で登場する青年は、その後

間もなく召集され、そして彼が乗って行った輸送船が台湾の近くで轟沈されてしまったのだ。無論、帰らぬ人となったわけだ。二人の愛を無残に引き裂いた元凶はほかならぬ戦争なのだ。こういう哀話は至るところで聞かされている。

B 29 の猛爆

「自分史」の教室にやってくる人たちは、まるで申し合わせでもしたかのようになり、「戦争中のつらかったことを書き残しておきたい」と口々に訴える。事のついでに「自分史」のモチーフの順位を申し上げると、第一位が戦争体験、第二位が若き日の恋愛、そして第三位は多様に分散するのだが、結局のところ男性は仕事に関わるもろもろの回想、女性は家庭生活にまつわるくさぐさの思い出ということになっている。

戦争体験は、厳密には戦場体験と銃後体験に分けるべきだ、と主張する向きもあるが、そのように二分できたのは精々日支事変までである。十五年戦争の末期に近づくにつれて、そんな区別にはなんの意味もなくなってしまった。なにしろ、国土のすべてが戦場と化してしまったのだから。しかし、なぜかプロの作家たちは激しい戦闘場面を中心に描きたがる。なるほど、そこには近代戦の悲惨な極限状況がみられよう。が、私はこう思う。もともと戦争などとはまったく無縁な人たちが、いやおうなく戦闘場面にまき込まれた惨状にこそ、戦争の作り出す最も深刻な悪が露呈しているのだ、と。

そのころ、Nさんはまだ16歳の少年であったのに、「学徒動員令」によって名古屋市にあった軍需工場に動員されていた。その16歳の少年の目が、B 29に爆撃された直後の凄惨な状況をこんなふうにとらえている。

これでもか、これでもかと執拗な爆撃を繰り返したB 29の大群がやっと立ち去った。不思議でならなかったのは、そんなとき、友軍機の反撃がたった二、三機に過ぎなかったことだ。後年になって知ったわけだが、そのころの制空権はもう完全にアメリカ軍に奪われていたのだ。

ふと気がつくと、いつの間にか日が暮れようとしていた。夕日の美しさとは逆に、工場上空に立ちこめる巨大な黒煙の物凄さは言葉ではとうてい言い

表せない。まだ、ところどころで、赤い炎がめらめらと燃えているのが、遠くからでもよく見える。急に寒くなってきた。

工場の敷地に戻ってみて驚いた。つい先ほどまで生産に励んでいた日本一の大工場が、忽然と消えてしまい跡かたもないではないか。あのおびただしい製品の山も、千人が会するといわれる大食堂もみんな吹っ飛ばされてしまっている。見渡す限り瓦礫の山である。さらに驚いたことには、広大な敷地内のあちこちに、見たこともない大穴がまるで噴火口のようにぱっくりと口を開けている。穴の大きさは学校の運動場ほどもあったろう。米軍の誇る一トン爆弾の威力をまざまざと感じさせられる凄まじさであった。すり鉢状の穴の底にはいつの間にか地下水が溜まり、あるいは青く、あるいは白濁して夕闇に光っている。この世のものとは思われないあの不気味さは生涯忘れられるものではない。

だんだん暗さが増してきた。寒さをこらえながら、私たちが先ほどまで入っていた防空壕の位置をやっと探し出す。案の定、直撃弾を受けたため、原形はほんのわずかしが残されていなかった。壕と運命をともにした人たちの阿鼻叫喚を思いやりながら、一同息をのんで合掌する。

いまだ童顔の失せない 16 歳そこそこの少年たちまで、駆り集めなければ航空機の生産が間に合わなかったのだ。それほど敗戦色は濃くなっていた。

それにしても、被爆直後の工場内は凄惨をきわめたものであった。Nさんは、「阿鼻叫喚」の惨状をこんなふうに写し取っている。読み進めながら、その場を想像しているうちに嘔吐感を催しそうになった。

工場のあちこちの瓦礫の山からは、死者の片腕や片足がにゅっと出ている。靴をはいたままの足首も多く、切断面からは幾本もの血管が伸びていた。犠牲者の眼球はほとんどが飛び出している。両手の指先は一樣に虚空をつかんでいる。大きく開かれた口の中には土砂がぎっしり詰まっていた。まさしく地獄絵図さながらである。もう正視するには耐えられなくなってきた。

花嫁の涙

昭和20年3月10日、334機のB29が東京を空襲した。その結果、本所・深川・浅草方面、いわゆる下町一帯は大被害を受けた。死者約8万(10万という説もある)罹災者は少なくとも50万人に及んだ、と伝えられている。

そのころ、井の頭公園の近くに住んでいた一人の主婦がこんな記録を残している。「井の頭公園の杉木立も次々と切られて行く、あれは亡くなった方々の棺に使われるのだ、という声が囁かれていた」。当時は、食糧はもとよりあらゆる生活必需品が底をつき、もう公園の樹木まで切り倒して棺を造らねばならぬほど物不足になっていたのである。

だが、どんな材木で造られていようが棺に納めてもらった人たちは、まだまだ幸せな部類に入る。下町のほうでは軍隊が出動して遺体を集め、それをトラックに乗せて本所公園に運び、公園の中央に塹壕のように横に長く掘った大きな穴にドサツ、ドサツと投げ入れ、そこを土で被うだけの処理で済ませていた、という目撃談が伝えられているからだ。

話の局面を大きく変えさせていただこう。

北上川がゆったりと流れている東北の片田舎でも、以下のようなつらい思いに遭遇した一人の子どもがいた。

手記の中で、まだ幼かった作者が「叔母」といっしょに“お百度詣り”をする光景が、不謹慎なようだが、私にはなにか呪術的な美しい舞いでも見せてもらっているような気がした。しかし、そこに繰り広げられた世界もまた、戦争という巨大な暴力によってむなしく潰されてしまった女ののたうつような苦悩が渦巻いている。

叔母は、恭三叔父の生存を信じ、毎夜のお百度詣りを決して欠かしはしなかった。祖母は帰還の手がかりのない三男の嫁が不憫でたまらない。

「夜道は暗いから、マキ子ついて行きな」と、お百度詣りのお供はいつも私にきまっていた。

暗闇の境内で、まるで何かに憑かれて舞うようにお百度を踏む叔母、私も叔母のからだにむしゃぶりついて一緒にお百度を踏んだ。踏み終わると、私

たちはもう汗びっしょりだった。

「おおきに、ありがとはん」

と、叔母はかすれたような声で幼い私をねぎらってくれる。その後は、安堵の笑顔を浮かべ私の額の汗をぬぐうのだった。私もまた、鼻の頭に米粒のように光る叔母の汗をふいてあげる。このお百度詣りは約一年以上も続いた。

それなのに、ある日、恭三叔父の「戦死」の公報が届けられた。そのとき、幼な心にも人の死というものはなんと悲しい残酷なものかと思ひ知らされた。それは、ついこの間のように鮮やかに思い出される。

そのころ、同じ岩手県の静かな農村に住んでいたY子さんは、まだ小学校2年生だった。彼女は、自分の幼い日の思い出をこんなふうに綴っている。

あの恐ろしかった戦争が終わった。そのころ、父は製鉄会社に勤め、母は内職に洋服の仕立てをしていた。近所の娘さんたちの何人かが、母のところへ洋裁を習いに通っていた。そんなわけで、いつもわが家には明るい笑い声が絶えなかった。(中略)

娘さんたちの中に、特別に私を可愛がってくれたK子さんという人がいた。いちばん美人でその上とても優しくかった。実は、そのK子さんが戦地に行っている母の弟をひそかに慕っていた、と噂されていた。

ところが、ある日、「母の弟」が戦死したという電報が届いた。それを知ったK子さんは眼を真っ赤に泣き腫らして小走りに立ち去った。あの悲しみの塊のような後ろ姿はいまだに忘れられない。

二、三年経ってからのことかと思うが、K子さんがお嫁に行くことになった。絵をかくのが得意だった私は、大好きなK子姉さんの花嫁姿を描かせてもらおうと、夢中でクレヨンを動かしていた。華やかな花嫁衣装を身につけたK子姉さんは見違えるように美しかった。そんなK子姉さんの瞳から大粒の涙がこぼれ落ちているのを見つけた。

よそのおばさんが、「かつらはとても重いのよ」と、半ば私に聞かせるように慰めていた。無性にかなしくなった私は、

「K子姉さんはかつらが重くて泣いているんじゃない！」
大声でおばさんに反発した。

この作者もごく普通に暮らしている主婦の一人である。ここには文章としてのできばえを越えた(文章としてもかなりよく書けている)事実の重さがある。大胆に言わせてもらおう。米軍が投下した一トン爆弾よりも、K子さんの流した一滴の涙のほうがはるかに重い価値をもっている——私は自信をもってこう言いたいのだ。

近松の世話物の世界を持ち出すまでもなく、人は余儀ない状況に追い詰められたときには、命と引きかえにしても愛のほうを選ぶではないか。戦争という巨悪は、そういうぎりぎりの選択まで不可能にさせてしまう。

幼い子どもだった作者の、「かつらが重くて泣いているんじゃない！」という反発には鋭い直観のきらめきを感じられる。しかし、一方、よそのおばさんだって、その間の事情を知っていなかったはずはない。むしろ、その言いようもない深い哀しみを知っているからこそ、純粋な子どもの目をそらさせたかったのであろう。「かつらが重いから……」という取りつくろいは、なんとかなしいウソではないか。そんなウソでもつかなければ、花嫁の複雑な胸中を察すればいたたまれなかったのに違いない。もちろん、花嫁の流した「清純な涙」にくらべれば、よそのおばさんの取りつくろいかたはいかにもトンチンカンだ。それは子どもにさえ見破られる稚拙なウソである。しかし、それが稚拙なウソであるゆえにこそ、かえって読み手をいつそう深い哀しみの淵に誘い込んでしまうのである。

付記 この稿は、雑誌『知識』(1990・11)に掲載されたものを改稿したものである。